



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イワン・マホフ「ろしやのいろは」をめぐって
Author(s)	兎内, 勇津流
Description	『はこだて外国人居留地研究会会報』第6号に掲載されたものに追記したもの
Citation	はこだて外国人居留地研究会会報, 6, 10-14
Issue Date	2009-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/40196
Type	journal article
File Information	tonai2009_rev.pdf



イワン・マホフ「ろしやのいろは」をめぐって

兎内 勇津流

幕末の1861年に函館で製作された、ロシア語学習用小冊子『ろしやのいろは』は、日本で最初のロシア語出版物と言える。これ以前、ゴロヴニンからロシア語を習った日本人が、ロシア語の学習書をつくった例があるが、手書きの本であって、印刷されたものではない。

また、この本は北海道での最初の印刷物と考えられたこともあった。北海道の出版史としては、高倉新一郎の『北海道出版小史』以降、長くまとまった仕事なかった。高倉の本では、松前藩校徼典館の『孝経』が古いとされていたが、市立函館図書館の蔵書目録では、『孝経』は慶応3年(1867年)刊と、より遅い時期のものと記述され、また、有珠善光寺の出版物は、道内で製作されたかどうか不明とされていたためである。

しかしながら、昨年刊行された『北海道出版文化史』に収められた高木崇世芝の論考によると、有珠善光寺の出版物は、もっと早い時期、少なくとも1853年以前から道内で製作されていたようで、『ろしやのいろは』は、道内製作の最初の出版物ではなさそうである。

この本は、その親しみやすさと珍しさからであろう、これまで、戦前も含めて何度か複製が製作された他、洋学史関係のマイクロフィルム『初期日本蘭仏独露語文献集』(雄松堂, 全34リール)に収められるなど、よく知られたものである。現物は、函館市中央図書館の他、天理大や大阪大、神田外語学院、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部にも伝えられ、函館市中央図書館のものは、1962年に市の有形文化財に指定されている。しかしながら、その制作者イワン・マホフに関しては、どのような人物か、はっきりしていなかった。まぎらわしいことに、ほとんど同時期に、箱館には、同姓のワシーリー・マホフという人物が滞在しており、二人のマホフが同一人物か別人か、研究者の間で誤解と戸惑いがあったのである。

戦後、函館にも滞在して日露関係を研究したジョージ・レンセン(1923-1979)は、北海道に残るロシア文化についての小冊子を著し、その数年後、1959年に、1875年の千島樺太交換条約までの日露関係史を著書にまとめたが、後者の400ページに付されたその註には、二人を混同してきたことを認めた上で、ワシーリーとイワンの二人のマホフが別人であること記すものの、その関係については言及がない。

また、1980年に刊行された『函館市史』通説編第1巻においては、ヨシフ・ゴシケヴィチ領事(1814-1875)が、1858年の箱館赴任に際して同伴した宣教師の名をイワン・マホフとするなど、二人のマホフの混同は、なかなか止まなかった。

しかし、その後、函館市史編纂室の清水恵(1959-2004)、北海道新聞記者の伊藤一哉、および長縄光男などの調査により、イワンはワシーリーの息子であることが確実となった。

父ワシーリーは、エヴフィーミー・プチャーチンの来日(1854-1855 年)に随行した司祭であるが、箱館に領事館を開くにあたり、ゴシケヴィチとともに赴任することを求められると、この時既に 60 歳を越えていて健康に自信がなかったのであろう、当時外務省の役人だったイワンの同行を求め、二人はゴシケヴィチの一行から遅れて任地に向かったのである。そのため、おそらく極東地方にいたのであろうフィラレートという司祭が、ゴシケヴィチに同行して、1858 年に箱館に、ワシーリー・マホフより先に着任した。

マホフ父子は、翌 1859 年、中国との交渉に向かう東シベリア総督ムラヴィヨフ・アムールスキー(1809-1881)の艦に同乗して、箱館に着任した。しかし、ワシーリーは、健康上の理由で帰国を願い、翌 1860 年に帰国してしまう。そのため、この年秋に、領事館付属教会が建った時、献堂式を執り行ったのは、フィラレートであった。彼は、ワシーリーの帰国時に交代せず、箱館に残っていたものと思われる。また、外務省の官僚であった息子イワンは、父親の仕事を手伝うことはできても、司祭としての資格は持たなかったのであろう。

イワンは、『海事論集』という海軍関係の雑誌に、箱館の印象記を何度か書き送っている。マホフだけでなく、1850 年代から 70 年代初めまで、同誌上において、箱館に関する記事は少なくない。しかしながら、1870 年代半ばを過ぎると、領事館が一時閉鎖されるなどのことがあり、同誌の函館に対する関心は低下したように思われる。箱館の領事館員たちが『海事論集』に寄稿した記事については、秋月俊幸が、『地域史研究はこだて』誌上に、一部を翻訳・紹介している。

箱館に着任後、マホフが最初に書き送った記事は、処刑の残虐さについてのものだった。その次には、七夕のことを書いている。マホフは、箱館が気に入らなかったようである。住居のつくりによるのであろう、箱館は寒いとこぼしており、また、日本らしい町ではないので、ここには日本のことはわからないなど、ネガティブな調子が目につく。

マホフは、上司のゴシケヴィチとはあわなかったらしい。長縄によれば、ゴシケヴィチの文書中、イワン・マホフが体調不良のため帰国を希望しているが仮病だとする報告書があるという。しかし、マホフは、海軍大尉ナジモフについて好意的に書いており、少なくとも彼とは気が合ったように思われる。ナジモフが『海事論集』に寄せた文章には、日本人の読み書き能力と教育について触れた箇所がある。

教育は至るところに普及している。学校は、男女両方のために区別なく、生徒の人数制限なしに存在する。どの都市や居住地や村落でも、すべての子どもが階級の区別なく就学できる。こうして、日本人は、国家の中で最も貧しい人でも読み書きができる、ということを達成した。

ナジモフは、日本の当時の教育状況を過大評価しているように思える。明治になって、学校教育はさらに普及したが、それでも必ずしも誰もが学校に通ったわけではないことを、われわれは知っている。しかし、19 世紀のロシアは、初等教育をうまく普及させることが

できず、19 世紀初頭のアレクサンドル一世（在位 1801-1825）期に大学を整備し、1870 年頃のドミトリイ・トルストイ文相（在職 1866-1880）期に中等教育の充実をはかるなど、上から体制づくりをすすめていた途上にあつて、初等教育は取り残されていた。こうしたロシアの状況にひきかえ、日本での読み書きの普及度には、目をみはるものを感じたのであろう。そうした見方を、マホフも共有していたように思われる。

マホフは、ロシア海軍の軍人ビリリョフが長崎でロシア語学校を開いたと聞いたことを書いている。この学校について、これまでの洋学史、あるいはロシア語学習史には記述がなく、どのようなものか、よくわかっていない。当時、長崎でロシア人からロシア語を学んだ人物としては、志賀浦太郎（1842-1916）が知られるが、彼のことなのだろうか。

そこで、『大日本史料』をめくると、幕末外国関係文書之四十八（2001 年）113 頁に、ロシア海軍の文書館に伝わる、次のような文書が収録されている。

長崎奉行岡部駿河守長常書簡 露国中国海域艦隊司令官リハチョフへ 露西亜語教授につき謝礼の件

露西亜語学修行いたし候栄之助・儀三郎は、貴国士官之向より語学教授被致候ニ付、通弁追々上達、用便ニも相成候間、猶此上出精次第取立方も可致と忝存候、此段礼謝申述候、謹言

万延二年正月廿四日

岡部駿河守（花押）

いわん・りはちゑふ君

上の文中、栄之助は、後の諸岡通義、儀三郎は、平山儀三郎のことという。諸岡通義は、この後、明治四年に副島種臣が、樺太国境交渉のため、ウラジオの西方、ポシエツ湾に派遣された時、外務省の文書少祐として、随行を命じられたことがわかっている（『日本外交文書』第 4 巻第 1 冊、1957 年、351 頁）。外務省に出仕し、語学力を評価されていたのであろう。

上の文を、多少なりとも組織的なロシア語教育が、長崎において展開された形跡と見ることができないであろうか。ビリリョフは、リハチョフの配下にあつたので、ビリリョフが教えたことに対して、このような礼状が出されてもおかしくない。

イワン・マホフは、ロシア外務省官僚のひとりとして、日本が西洋諸国についての知識を急速に深めていることに注目し、ロシアの文化的影響力を強めていく必要を感じることを、本国に書き送っていた。（本国に対するアピールが込められている可能性もあるが）

ここ 5・6 年の間に、日本人のヨーロッパ諸国に対する知識は急速に前進しました。英語の通訳は、たくさんいます。フランス語は 5 人が学んでいて、急速に進歩していると聞きます。ロシア語については、沈黙するか、（中略）今や、日本人自身が、次のよう

に頼んできます。「われわれは、ロシアの隣人です。しかしわれわれにはまだ自前のロシア語通訳がいません。教師をください。教室と生徒は用意できています」と。

1860 年から 61 年はじめにかけて、マホフが自前でロシア語初等読本を製作したのは、以上のような状況においてであった。

『ろしやのいろは』は、西洋式の金属活字を使用せず、整版によって製作された、全部でたった 20 頁の小冊子である。アルファベット、音節、ごくわずかの語彙が与えられるだけで、格変化や動詞の時制・活用などの文法事項に踏み込むものではない。ロシア語の読みや語義を示す日本語を併記する。図版は、最初と最後にあるだけである。全体として、1580 年代のイワン・フォードロフ以来の、伝統的な、ロシア語初等読本の流れを組むように思える。その後、視覚的アルファベットのとらえ方を重視する初等読本の流れも生まれたが、マホフの教養は、前者の流儀に由来したということであろう。

こうした、ロシア語初等読本の作り方は、それ自体、重要な研究対象であり、マホフの位置づけについても、今後、さらに検討の必要がある。出版部数は 400 といわれるが、本人が『海事論集』に書き送った記事からは、500 部とも読める。

現在伝わっている原本や、復刻版については、沢田一彦が「日本で出たロシア語刊行物(1861-1988 年)書誌」(『白系ロシア人と日本文化』所収)にまとめているが、多少補うべき点がある。G. イワノワは、ロシア科学アカデミー東洋学研究所ペテルブルク支部に、ゴシケヴィチが伝えた 1 冊が伝わっていると記している。彼女によれば、本の末尾には、アルメニア教会の首長(カトリコス)のいるエチミアジン修道院が描かれているという。イワノワは、全部の本がそうになっているように考えているが、日本に伝わっている本には、わたしの知る限りそのような図は見あたらず、ゴシケヴィチの本に、後から、特に付されたものと思われる。

雄松堂の製作した前出のマイクロフィルムは、神田外語学院所蔵本を撮影したものである。この本の冒頭には、「魯西亜ゴシケキツ所贈之書也 芝赤羽根外国人旅宿書ニテ 田原毅 魯西亜伊呂波 ... 」とあり、ゴシケヴィチが江戸で頒布した本のうちの 1 冊であることがわかる。『大日本古文書』幕末外国関係文書之五十(2005 年)404 頁には、外国奉行水野忠徳がゴシケヴィチから「ロシヤイロハ」を贈呈されたことを老中に報告する文書が収められている。赤羽根は、赤羽とも書く。幕府が江戸で外国人応接所を設けた場所で、その応接所は、現在の港区東麻生の飯倉公園付近にあった。

イワン・マホフは、1861 年、帰国した。これは、宣教師ニコライの箱館赴任と同じ年である。その後の消息は、まだわかっていない。

参考文献:

秋月俊幸「ロシア人の見た開港初期の函館」『地域史研究はこだて』3 号 (1986 年)

伊藤一哉「ゴシケーヴィチが見た幕末日本」(7) 『歴史読本』743 号(2001 年 11 月)

古賀十二郎『長崎洋学史』上 (長崎文献社, 1966 年)

沢田一彦『白系ロシア人と日本文化』(成文社, 2007 年)

清水恵「二人のマホフとフィラレート司祭」「函館ロシア領事館附属教会と修道司祭フィラレートについて」『函館・ロシア：その交流の軌跡』(函館日ロ交流史研究会, 2005 年)所収
『市立函館図書館郷土資料分類目録(昭和 39 年 12 月 31 日現在)』第 1 分冊、(市立函館図書館, 1966 年)

『大日本古文書』幕末外国関係文書之四十八, 同五十(東京大学出版会, 2001 年, 2005 年)

高木崇世芝「幕末・明治初期の出版物」『北海道の出版文化史：幕末から昭和まで』(北海道出版企画センター, 2008 年)所収

高倉新一郎『北海道出版小史』(日本出版協会北海道支部, 1947 年)

長縄光男『ニコライ堂異聞』(成文社, 2007 年)

『日本外交文書』第 4 巻第 1 冊(日本外交文書頒布会, 1957 年)

『函館市史』第 1 巻 (函館市, 1980 年)

Lensen, George. Report from Hokkaido : the Remains of Russian Culture in Northern Japan. Hakodate, 1955.

Lensen, George. The Russian Push toward Japan : Russo-Japanese Relations, 1697-1875. Princeton, 1959.

Okenfuss, Max J. The discovery of Childhood in Russia : the Evidence of the Slavic Primer. Newtonville, MA, 1980.

Иванова, Г.Д. Православные священники в Японии в конце периода Токугава. В кн. «Православие на Дальнем Востоке» вып. 3, СПб., 2001.

Махов, В. Фрегат «Диана» : путевые записки. СПб., 1867.

Махов, И. Из Хакодате «Морской сборник» т. 52~67. (1861~1863)

Назимов, И. Из воспоминаний об Японии. «Морской сборник» т. 55 (1861)

Тонай, Ю. О букваре, изданном в Хакодате И. Маховым в 1861 году. В кн. «Региональное книговедение : Сибирь и Дальний Восток : памяти С.А. Пайчадзе». Новосибирск, 2008.

(追記)本報告の後、函館市中央図書館の馬場文庫が、同館 2 部目の『ろしやのいろは』を含むことに気付いた。市立函館図書館時代の目録の記述では、マホフ自身の書き込みがあるとのことで、後日、調査したい。

本報告の直後、伊藤一哉『ロシア人の見た幕末日本』(吉川弘文館, 2009 年)が上梓されているので、参考文献として追加したい。(HUSCAP 収録に際しての追記 2009.12.21)